イスラーム世界研究　第 17 巻（2024 年 3 月）97–125 頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 17 (March 2024), pp.97–125

知の先達たちに聞く（15）

――鎌田繁先生をお迎えして――

2023年6月6日（火）、鎌田繁先生をお招きし、「知の先達たちに聞く―鎌田繁先生をお迎えして―」と題して講演会を開催した。

鎌田繁先生は、イスラーム思想史、とくにシーア派とスーフィズムの研究を先導してこられた。その成果は、単著の『モッラー・サドラーの霊魂論 ―『真知をもつ者たちの霊薬』校訂・訳注並びに序説』（イスラム思想研究会、1984）、『イスラームの深層―「遍在する神」とは何か』（NHK 出版、2015）、共著の『古典への誘い』（いきいきトーク知識の泉　著名人が語る＜知の最前線＞ 第 2 巻 リブリオ出版、2007）、編著の『聖典と人間』（鎌田繁・市川裕編、宝積比較宗教・文化叢書第 6 巻、大明堂、1998）、『超越と神秘―中国・インド・イスラームの思想世界』（鎌田繁・森秀樹編、宝積比較宗教・文化叢書第 2 巻、大明堂、1994）などの多くの著書・論文にまとめられている。なお、先生の古希をお祝いして、森本一夫・井上貴恵・小野純一・澤井真編『イスラームの内と外から―鎌田繁先生古希記念論文集』（ナカニシヤ出版、2023）が出版された。

「極私的イスラーム研究」と題されたこの講演会では、丹念な原典読解と深い思索によって発言を続けてこられた鎌田先生のこれまでの研究生活について、ご回想いただいた。大学入学以前の内省的な日々のお話は、親しくお付き合いさせて頂いてきた私たちにとっても初めて伺うものであった。「宗教の枠組のなかでスーフィズムを見るよりも、イスラームの枠組のなかで見ることの方に意味がある。」という考えにどのようにして至ったかを、先生のご経験に照らして、お話しくださった。

以下、講演会記録に移る前に、鎌田先生の略歴を記しておきたい。先生のご業績については、講演会記録の後に記載した。

鎌田繁先生――略歴――

1951 年 3 月　東京都に生まれる
1969 年 3 月　東京都立西高等学校卒業
1970 年 4 月　東京大学教養学部文科 3 類入学
1974 年 3 月　東京大学文学部（宗教学宗教史学専門課程）卒業
1974 年 4 月　東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専修課程修士課程入学
1976 年 3 月　同課程修士課程修了（修士論文：al-Sarrāj の taṣawwuf 観について）
1976 年 4 月　同課程博士課程進学
1977 年 8 月～1982 年 3 月　Institute of Islamic Studies, McGill University (Montreal, Canada) 留学
1982 年 3 月　東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専修課程博士課程単位取得退学
1982 年 4 月　東京大学助手採用（新設の文学部イスラム学研究室）
1984 年 3 月　東京大学助手辞職
1984 年 4 月　東京外国語大学非常勤講師採用
1984 年 9 月　東京大学東洋文化研究所助教授採用
1995 年 9 月　東京大学東洋文化研究所教授

2016 年 3 月　東京大学東洋文化研究所定年退職
2016 年 6 月　東京大学名誉教授

極私的イスラーム研究

私は一応イスラーム研究者と皆さんに思われているわけですが、そうは言っても、イスラームの研究を始めたのは大学、むしろ大学院に入ってからの話です。ですから、私がイスラームの研究をするようになった道筋は、その前に私がどんな人間だったのかということとも関係してくるのではないかと思っています。ですから、今日の話は年寄りの昔話のような感じになってしまうかもしれません。そうなってしまえば、それも事実ですからそれで諦めていただきたいと思います。研究者としての私を判断するのであれば、大したものも書いていませんが、私がこれまでに書き散らした論文類を読んでいただいて、そこから判断していただくしかないと思います。今日お話しすることは、ですから、それらの論文のなかで書いてきたことに直接関わるものではなく、私がそのようなイスラームについての論文を書く前の私の心の有り様とでもいうか、イスラーム研究に至る前段階を中心に少しお話しすることができればと思っています。

それで、一応時間軸に沿う形で、1. 研究以前、2. 宗教学、3. イスラーム研究、4. 研究の視野の拡大、という 4 つの節に分けて話を進めたいと思います。

1. 研究以前（～東京大学教養学部）

私の育った家は、仏壇も神棚もない家でした。四国の片田舎で生まれた父が百姓になるのを嫌い立身出世を目指し刻苦勉励して官僚になり、私が生まれた年に建てた小さな家で、いわゆる宗教的な関わりというのが一切ない、そういう家でした。仏壇も私の父が亡くなった時に、「位牌を置くのにやっぱり仏壇ぐらいないとまずいのではないか」と考え、仏壇を買って来たという、その程度の家です。ですから、そういう意味では私の兄姉妹をはじめ、宗教などというそんな変なものに興味をもつ者はいないというのがうちの状況でした。日本の全体から見るとある意味では普通のうちかもしれないですね。日本で宗教を研究している人は、何らかの教会や教団に関わっている方が多いという印象がありますが、日本全体をみると、宗教団体に関わっている人の方がはるかに少ないですから、大多数の世俗的人間から見ればそのような研究者はかえって不思議な人たちではないのかという気がしています。ですから、その意味では世俗社会のまっただなかにいる普通の私が宗教をやるということが、むしろ奇妙なことかなと思うわけです。

このような環境にあった私がなぜ宗教に興味をもつようになったのかいろいろ考えてみると、伝統的な村落共同体の中に生きる宗教への関心のようなものがあるのです。中学生の時に、それまではほとんど付き合いのなかった親戚の大学生が、親しく出入りするようになったのです。その親戚のうちはいわゆる「近江商人」の系譜にあり、今も近江に大きな古い家をもって暮らしています。そこの家に遊びに行ったりするうちに、何か昔からの風俗、習慣の中に生きている生活というのが見えてくるのです。お寺とか神社とかさらには路傍のお地蔵様までがもう本当に生活の中に入り込んでいますし、1 週間ぐらい遊びに行くと、そのうち一晩くらいはお灯明番という、部落の神社の本殿にろうそくの火を灯す係がまわってきます。今でこそ世の中は明るくなっていますが、もう 50 年以上前の話ですから、夜は本当に真っ暗で何も見えないのですね。提灯か何かをぶら下げて神社に行くのですが、その神社というのが何かよく分からないのですが、すごく怖いのです。土